The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

パーリ文献における禅定論の系譜

馬　場　紀　寿

本稿は，上座部大寺派のパーリ註釈文献で説かれる禅定論が成立する過程を伝承史的に解明する．以下に示した文献の成立順序に沿って，禅定論を検討する．

律・経（四部）⇒『分別論』⇒『解脱道論』⇒『清浄道論』

I．律・経から『分別論』へ

パーリ経典の禅定論については，藤田宏達［1972］，Schmithausen［1981］，Vetter［1988］，並川孝儀［1999］，藤本晃［2005］など，膨大な先行研究がある．諸経典には，四段階の禅定から成る〈四禅〉，四禅の上に四無色定が加わった〈八禅〉，八禅の上に想受滅定が加わった〈九次第定〉などの禅定がそれぞれ別個に説かれている．経典の段階では，これらの諸禅定を統括する体系はまとめられておらず，文脈も経典によって異なる．これに対して，禅定分別（Jhānavibhaṅga）という一章を設け，はじめて禅定を一括して取り上げたのが『分別論（*Vibhaṅga*）』である．

『分別論』は，各章が主として経部門（Suttantabhājaniya）とアビダンマ部門（Abhidhammabhājaniya）から成る．しばしば経部門の綱要（mātikā，論母）として経典を引用し，アビダンマ部門においてアビダンマに独自の議論をしていること（水野弘元［1997: 223-266］）から，『分別論』が経典（四部）の後に作成され，経典の教説を継承・発展させた作品であることは明らかである[1]．

『分別論』の一章，禅定分別は，綱要（Vbh 244-245）で，経典に説かれる八禅説を引用する．経部門（Vbh 245-263）では，この綱要を註釈しつつ，八禅を説く．一方，アビダンマ部門（Vbh 263-269）では，綱要の註釈という体裁をとらず，四禅の定義をしている．しかも，その定義は，経典には見られない，アビダンマに独自の内容である[2]．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

このように，『分別論』では九次第定は説かれない．この点で，『分別論』は，自らの禅定論として四禅説と八禅説に絞ったということができる．ただし，この段階では，経的な「八禅」説とアビダンマ的な「四禅」説が並立しているだけであり，両者の関係は必ずしも明らかではない．この課題を解決するのは，次の段階となる．

II．『解脱道論』の禅定論

『解脱道論』は，ウパティッサによって著された修行体系を説く作品である．『解脱道論』は『分別論』に言及しているから[3]，ウパティッサが『分別論』を用いて『解脱道論』を執筆していたことが分かる．今日，『解脱道論』原本は失われたが，幸い，漢訳と一部チベット訳が残り，その全体像を知ることができる[4]．『解脱道論』全体の修行体系は，戒・定・慧から成る「三学」とともに，戒・四禅・六神通（五種の神通と漏尽知）から成る「四禅六通」という修行プロセスを基本にしている[5]．この点を踏まえた上で，以下に，『解脱道論』の，禅定に関する部分の構成を見ていこう．

『解脱道論』ははじめに三昧（「定」：*samādhi）を総説し（「分別定品」：T32, 406c-408a），その中で「四禅」を定義する（T32, 408a1-5）．その内容は，『分別論』のアビダンマ部門に基づく．さらに，善知識の求め方を述べ（「覓善知識品」：T32, 408a-409b），人の性格を分類した（「分別行品」：T32, 409b-411a）後で，業処（瞑想対象）に関する長い解説を始める．まず業処の総説（「分別行処品」：T32, 411a-412b）を論じ，次に業処の各論（「行門品」：T32, 412b-441a）を示すのである．

業処の各論の中でも，第一業処である「地一切入」（地遍）の説明はかなり長い．これは「地一切入」が業処の中でも重要だからではなくて，ここで禅定の解説をしているからである．この箇所は注意が必要である．構成としては業処の各論部分であるが，この箇所で規定しているのは業処を通して得られる禅定の内容である．単に第一業処を解説しているではなく，禅定の逐語的解説をしているのである．ここで『解脱道論』は「四禅」と「四無色禅」の両方から成る「八禅」を説く（T32, 415a7-422b19）．この箇所は『分別論』の経部門に対応する部分である．

上に示した二ヶ所の下線部から分かるように，『解脱道論』は三昧の総説部分で「四禅」を定義し，業処の解説部分で「八禅」を定義している．前者が『分別論』のアビダンマ部門に基づき，後者が『分別論』の経部門に依拠しているから，総体として見れば，『解脱道論』は『分別論』の経部門とアビダンマ部門の禅定

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

論を両方とも含んでいる．『解脱道論』は，『分別論』に忠実に禅定を規定しているのである．

しかし，『解脱道論』が『分別論』の禅定論を忠実に再現したことは別の問題をも生み出すこととなった．すでに指摘したように，『解脱道論』全体の修行体系は「四禅六通」説に基づいており，禅の総説部分では『分別論』（アビダンマ部門）から四禅説を引用していた．しかし，それと同時に，『解脱道論』は『分別論』（綱要・経部門）に基づいて禅を解説したために，業処の解説部分では，「八禅」全体を説いている．そのため，修行体系全体の骨格である四禅六通説に，八禅説が接合されてしまっている．『解脱道論』は，「四禅六通」説と「八禅」説との折衷型に陥っているのである．

Ⅲ．『清浄道論』の禅定論

『清浄道論（*Visuddhimagga*）』は，五世紀前半（おそらく四二九年以前に），ブッダゴーサ（Buddhaghosa）によって著された[6]．執筆に当たっては，ブッダゴーサが『解脱道論』を批判的に用い，その大綱を継承しつつも，各所に削除・改変といった編集作業を施している[7]．この点を踏まえた上で，『清浄道論』の禅定に関する部分の構成を見ていこう．

『清浄道論』ははじめに「三昧（samādhi）」を総説し（Vis Chap.3: 68-95），その中で『分別論』のアビダンマ部門に基づく四禅の定義をする（Vis Chap.3, § 21: 71.17-22）．この個所は，『解脱道論』（T32, 408a1-5）からそのまま引用した文章である．その後で，善知識の求め方を述べ，人の性格を分類し，業処（kammaṭṭhāna, 瞑想対象）の概論を説いている．その後で，業処に関する長い解説が始まる．まず業処の総説を論じ，次に業処の各論を示している（Vis Chap.4-11: 96-313）．この構成は『解脱道論』とほとんど同じである．

『清浄道論』の第一業処（地遍）も，業処の各論の中でかなり説明が長い．長い理由も『解脱道論』と同じである．地遍が業処の中でとくに重要だからではなくて，第一業処である地遍の説明の中で禅定の内容に関する逐語的な解説をしているからである．

この業処の解説部分で『解脱道論』は「八禅」を解説していた．ところが，『清浄道論』はここで「八禅」を説かない．この箇所で説かれるのは「四禅」のみである（Vis Chap.4, § 79-197: 113.28-136.32）[8]．この点こそが『解脱道論』と『清浄道論』の禅定に関する最大の相違点である．『解脱道論』の場合，業処の解説部

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

分で示される禅の内容は「八禅」なのであるが，『清浄道論』では「四禅」である[9]．この点で，『清浄道論』の禅定修習論が「四禅」中心に構成されていることは明らかであろう．

Ⅳ．ブッダゴーサの編集作業

ⅡとⅢで見たように，『解脱道論』では四禅説と八禅説が併存しているのに対し，『清浄道論』では「四禅」に絞られている．ブッダゴーサは『解脱道論』に基づいて『清浄道論』を編纂したから，「四禅」説を禅定修習論の柱に据えることによって，「四禅」六通説の構造を鮮明にしたことが分かる．両書の相違とブッダゴーサの編集作業を表にまとめると次のようになる（括弧内は『分別論』の部門名）．

	『解脱道論』	『清浄道論』	編集作業
三昧の総説部分	四禅（アビダンマ部門）	四禅（アビダンマ部門）	継承
業処の解説部分	八禅（経部門）	**四禅（アビダンマ部門）**	**改編**

ブッダゴーサが八禅説を四禅説に改編した結果，四無色禅の位置づけが問題になる．四無色禅は，切り捨てられた八禅中の上位四禅に当たるからである．そこで，ブッダゴーサは，四禅説と業処との関係について編集作業を行っている．この点に関して，両書を比較してみよう．

『解脱道論』も，『清浄道論』も，四種の無色（āruppa：形のない状態，非物質的存在）を業処として取り上げている．『解脱道論』は業処の総説の箇所で業処に三十八あると定義し（T32, 411a9-a16），そのうち，第九，第十，第三十七，第三十八の業処は四無色に当たる（森祖道［1982］）．『清浄道論』も，四十業処の中に四無色を数え（Vis Chap.3, § 105: 89.37-90.1），独立した一章で一括して論じている．

さて，『解脱道論』は，八禅と業処の関係を論じる中で，「四行處（虚空一切入・識一切入・無所有処・非非想処）が四無色禅を実現する[10]」と説く．業処としての四無色を，八禅中の四無色禅に対応させているのである．

一方，『清浄道論』は同じ箇所で，四禅と業処の関係を論じつつ「第四梵住と四無色とは第四禅に属する[11]」と説く．ブッダゴーサは，四無色を第四禅に属させている．この編集作業により，ブッダゴーサは，四無色を第四禅に属する業処に位置づけ，八禅説から四禅説へ切り替えることに成功した．これならば，四無色禅を何ら否定することなく，修行コースを「四禅」説に一本化することがで

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

きる[12]．この編集作業の結果，ブッダゴーサは，「四禅六通」に「八禅」が組み込まれるという『解脱道論』の折衷状態を解消し，「四禅六通」説に基づく明確な修行体系を打ち出したのである．

V．結論

もともと律蔵や経蔵で未整理のまま散説されていた数種の禅定説は，『分別論』と『解脱道論』を経て，『清浄道論』において体系化された．本稿の結論は次の三項目にまとめられる．

① 『分別論』の禅定分別は二種の禅定を説く．綱要では経典で定型的に説かれる八禅説を引用し，経部門では綱要の八禅説を註釈する．一方，アビダンマ部門では，四禅を解説し，経典には確認できない独自の禅支定義をする．

② 『解脱道論』は，『長部』戒蘊品の四禅六通説を全体の修行過程として採用しつつも，『分別論』の禅定説を取り込んだため，禅定修習論の構成は「四禅六通」説と「八禅」説の折衷型となった．四禅を引用する個所では，『分別論』の経部門に基づいた解釈をし，八禅を引用する個所では，『分別論』のアビダンマ部門に基づいた解釈をしている．

③ 『清浄道論』は，『解脱道論』の「八禅」説を「四禅」説に変更することにより，「四禅六通」説の立場をいっそう明確に打ち出した．八禅の上位四禅に当たる四無色禅は業処として第四禅に属すると解釈された．これはブッダゴーサの編集作業によるものである．

『律註（*Samantapāsādikā*）』は，律蔵の註釈という体裁に合わせて文章に手を加えながら，『清浄道論』の禅定説を引用し[13]，『長部註（*Sumaṅgalavilāsinī*）』，『中部註（*Papañcasūdanī*）』，『相応部註（*Sāratthappakāsinī*）』，『増支部註（*Manorathapūranī*）』から成る四部註は，『清浄道論』の，禅定を含む修行体系を全面的に支持し，『清浄道論』を参照するよう勧める[14]．これらパーリ註釈文献に見られる，上座部大寺派の正統的な禅定論は，『清浄道論』によって確立したのである．

※略号および使用テキストについては，馬場紀寿［2008:(1)-(4)］参照．

〈引用文献〉

佐々木閑［1997］「Visuddhimagga と Samantapāsādikā (1)」『仏教大学総合研究所紀要』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

#4, pp.35-63.
並川孝儀 [1999]「初期仏典における四無色定の成立」『印度哲学仏教学』#14, pp.40-54.
馬場紀寿 [2008]『上座部仏教の思想形成——ブッダからブッダゴーサへ』東京：春秋社.
林隆嗣 [2008]「アバヤギリ派の五蘊・十二処・十八界—『有為無為決択』第13章—」『仏教研究』#36, pp.167-208.
藤田宏達 [1972]「原始仏教における禅定思想」『佐藤博士古稀記念　仏教思想論叢』東京：山喜房仏書林, pp.297-315.
藤本晃 [2005]「パーリ経典に説かれる「九次第定」の成立と構造」『印度学仏教学研究』#53-2, pp.(114)-(117).
水野弘元 [1996]『水野弘元著作選集第一巻 仏教文献研究』東京：春秋社.
水野弘元 [1997]『水野弘元著作選集第三巻 パーリ論書研究』東京：春秋社.
森祖道 [1982]「業処説の種々相」『田村芳朗博士還暦記念論集　仏教教理の研究』東京：春秋社, pp.127-140.
Bapat, P.V. [1937] *Vimutti-magga and Visuddhi-magga, a Comparative Study*, Poona.
Schmithausen, L. [1981] "On Some Aspects of Descriptions or Theories of 'Liberationg Insight' and 'Enlightenment' in Early Buddhism", *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, Wiesbaden, S.199-250.
Vetter, T. [1988] *The Ideas and Meditative Practices of Early Buddhism*, Leiden.

1）馬場紀寿 [2008：162-184]
2）四禅の各段階で数えられる禅支（jhānaṅga）の数は，同じ『分別論』であっても経部門とアビダンマ部門で微妙に異なる．経部門は，第一禅＝五支，第二禅＝四支，第三禅＝五支，第四禅＝三支とするのに対し，『分別論』アビダンマ部門は，『法集論』心生起品（Dhs § 160, § 161, § 163, § 165）と同様，第一禅＝五支，第二禅＝三支，第三禅＝二支，第四禅＝二支とする．第二禅，第三禅，第四禅の禅支の数が異なるのである．
3）Bapat [1937]，水野弘元 [1996：146] 参照.
4）『解脱道論』の先行研究は，馬場紀寿 [2008：136, note.2]，林隆嗣 [2008] 参照.
5）すでに拙著（馬場紀寿 [2008:94-101]）で論じたように,『解脱道論』と『清浄道論』は，『長部』戒蘊品の諸経において定型的に示される四禅六通説を継承している.
6）『清浄道論』を含めた，ブッダゴーサ作品の成立状況については，先行研究を踏まえて，馬場紀寿 [2008：14-15] がまとめている.
7）馬場紀寿 [2008：89-153]
8）『清浄道論』は四禅説に続いて五禅説にも言及するが,五禅説は「四禅」の「第二禅」を「第二禅」と「第三禅」へ分割したものに過ぎず，四禅説との本質的な相違はない（Vis Chap.4 § 198-202：136.33-137.22）.
9）『清浄道論』は，『法集論』心生起品と『分別論』アビダンマ部門で説かれる四禅説

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を nippariyāya と呼んで重視するのに対し，『分別論』の経部門で説く〔八禅中の〕四禅説を，pariyāya と位置づけ，nippariyāya に補助支を加えたものとして解釈している（Vis Chap. 4，§ 149-150：128.1-13；Chap. 4，§ 178-179：132.31-133.6）．『清浄道論』は，経部門とアビダンマ部門の禅支説を併記しつつも，アビダンマ部門に沿って理解するよう指示している．

10）四行處成就無色四禪．（T32，411a22-23）

11）catutthabrahmavihāro cattāro ca āruppā catutthajjhānikā（Vis Chap.3，§ 107：90.11）

12）この編集作業に関連して，ブッダゴーサは第四禅と無色禅が禅支の点で同質であることを強調する（Vis Chap.10，§ 58：282.7-10）．『解脱道論』では，色界の禅定（四禅）から四無色禅に入るに当たって，修行者（坐禅人）が「色界の禅定は粗雑である」（T32，420c）と思惟する．それに対して，『清浄道論』では，修行者が無色禅より色界の第四禅は粗雑であると考えるが，四無色禅と色界の第四禅は同じ禅支を共有するから，禅支の点では粗雑ではないと説く（Vis Chap.10，§ 5：272.1-7）．この記述は『解脱道論』にないから，明らかにブッダゴーサが内容を書き加えたものである．

13）佐々木閑［1997］は，『律註』が『清浄道論』の禅定説を『律』の註釈の体裁に直しつつ大量に引用していることを明らかにした優れた研究である．ただし，『律註』の禅定説が『清浄道論』よりも『解脱道論』に一致する，という主張が成り立たないことは，拙著（馬場紀寿［2008：140-141，note 22］）で指摘した．

14）馬場紀寿［2008：14-19］

（本稿は，平成19年度JFE21世紀財団アジア歴史研究助成による研究成果の一部である）

〈キーワード〉　四禅，八禅，『分別論』，『解脱道論』，『清浄道論』，ブッダゴーサ

（東京大学東洋文化研究所助教，博士（文学））

NII-Electronic Library Service